

清寧天皇 河内坂門原陵外堤入水管改修工事に伴う立会調査

本陵における調査は、外堤・飛地などでこれまで数多く行われてきた⁽¹⁾。今回の調査は、南側渡土堤が外堤と接続する箇所埋設された陶製入水管が経年の劣化により破損し、外堤上面が陥没したことによる改修工事に伴い実施したものである。調査にあたっては、古市陵墓監区事務所の協力を得て、平成21年8月24～27日の期間で実施した。

陥没の範囲は、長さ・幅とも約2mであったが、工事の関係上濠側斜面を開削し、最終的な掘削規模は長さ4m×最大幅2.4m×深さ最大2mとなった。不整形な形状であったため、できる限り壁面を整えたが完全に直線的にはできなかったため、作成した断面図は見通し部分を多く含んでいる。調査の所見は以下のとおりである。

土層は、外堤盛土の単位がそれぞれ濠側に向かって下る状況を示している。薄い表土（Ⅰ）の下で確認できる盛土は2段階にわかれる（Ⅱa・Ⅱb）。今回調査の原因となった陶製入水管は濠側2mの部分について、保護のため上部をコンクリートで覆ってある。その工事を行うために外堤を開削した際の埋め戻し土がⅡa層である。下位にⅡb層を認めるが、陶製入水管設置の掘形がないため、Ⅱb層は現在の外堤盛土であると同時に、入水管設置の埋め戻し土であることがわかる。よって、Ⅱ層は本陵築造時の外堤盛土ではない。

入水管設置面より下は、砂を含んだ堅緻な粘質土である（Ⅲ）。Ⅲ層上面の標高は39.3mであり、これまでの外堤や隣接地での調査結果などから、地山と考えられる⁽²⁾。南面の一部については断ち割りをを行い、標高38.7mまで掘り下げた。そこまで掘り下げると、少量の礫を含み砂の割合も低くなるが、土層の特徴は大きく変わらない。Ⅲ層上面は、南面の断面図を見ると樋管の左側において比較的平坦であるが、これを本来の外堤上面と考えるだけの根拠に乏しく、削平を受けている可能性を考えおく必要がある。しかし、いずれにしても本陵に本来備わっていた外堤の一部をなしていたものと考えられよう。

今回の調査で遺構・遺物は確認されず、改修工事は予定どおり施工した。 (清喜裕二)

註

(1) 笠野 毅「河内坂門原陵外堤護岸工事区域及び陵前排水枡設置箇所の調査」『書陵部紀要』第32号、宮内庁書陵部、1981年。

井上喜久男「河内坂門原陵前整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第32号、宮内庁書陵部、1981年。

福尾正彦「河内坂門原陵樋門改修その他工事箇所の調査」『書陵部紀要』第49号、宮内庁書陵部、1998年。

徳田誠志「清寧天皇 河内坂門原陵飛地い号境界線保護工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部、2001年。

徳田誠志「清寧天皇 河内坂門原陵見張所改築工事箇所の調査」『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部、2001年。

清喜裕二「清寧天皇 河内坂門原陵外堤公共用水路設置工事箇所の立会調査」『書陵部紀要』第54号、宮内庁書陵部、2003年。

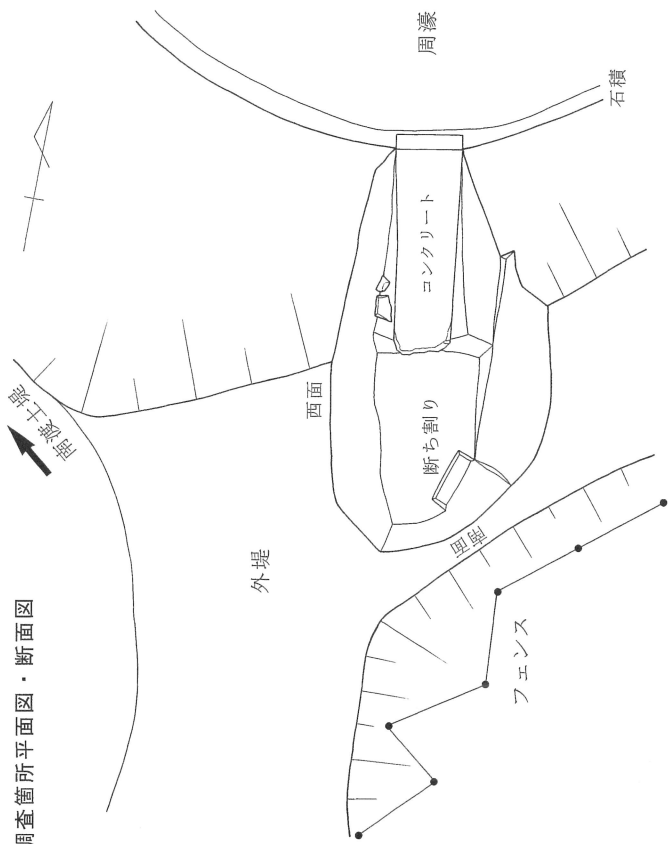
清喜裕二「清寧天皇 河内坂門原陵堆積土除去その他整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第60号、宮内庁書陵部、2009年。

(2) 河内一浩「白髪山遺跡」『古市遺跡群』XXII（『羽曳野市埋蔵文化財調査報告書』43）、羽曳野市教育委員会、2001年。

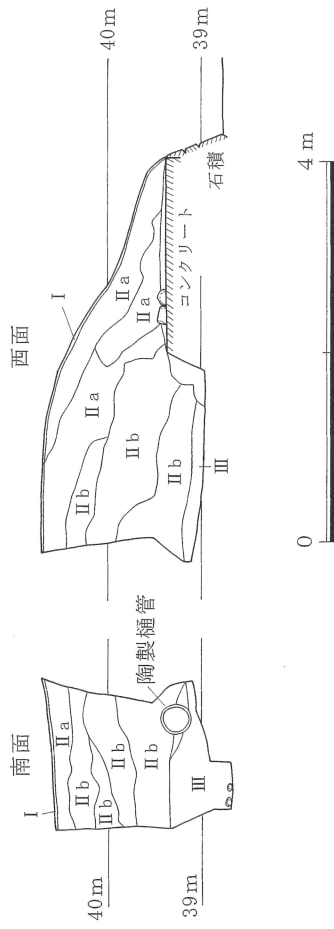
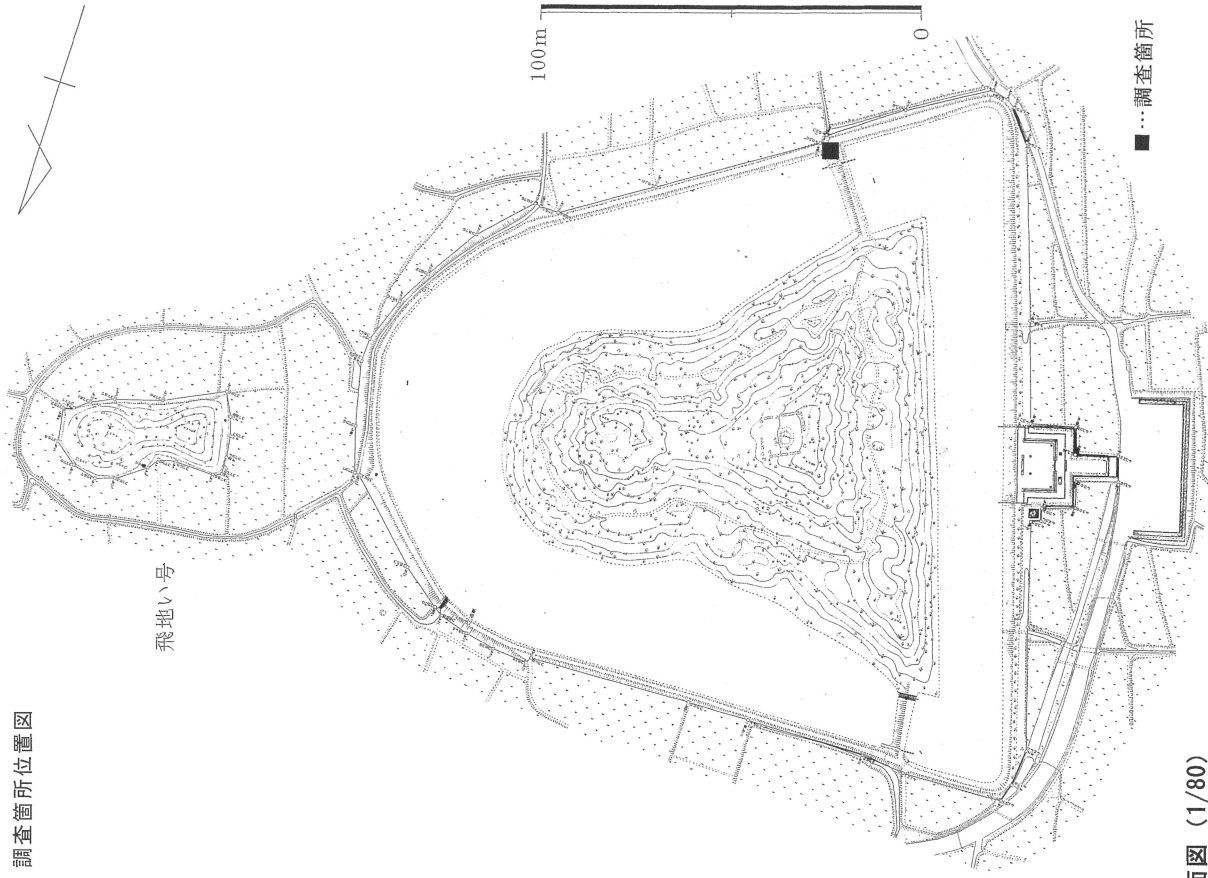
河内一浩「白髪山遺跡」『古市遺跡群』XXVI（『羽曳野市埋蔵文化財調査報告書』54）、羽曳野市教育委員会、2005年。

河内一浩「白髪山古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告書—平成15年度—』（『羽曳野市埋蔵文化財調査報告書』57）、羽曳野市教育委員会、2006年。

調査箇所平面図・断面図



調査箇所位置図



第36図 河内坂門原陵 調査箇所位置図 (1/2000) および平面図・断面図 (1/80)